どじょうのささやき

41号 2011.1月

発行 丸永建設株式会社

〒692-0023 島根県安来市黒井田町1895-3

フリーダイヤル 0120-976-510

FAX (0854) 23-2348

どじょうのつぶやき

新しい年のスタートは、大晦日から続いた豪雪で始まった。▼温暖化が言われるようになってから、降ってはすぐに融ける雪に慣れていた山陰人には、予想も出来ないような被害が続出した。▼次々と流れるニュースに耳を傾けながら、近年「違和感」を感じていた言葉を思い出した。▼『ＥＣＯ』・・・「地球に優しい」とか「地球のために」とかいうが、本当は「人間のため」なのになぜそう言わないのか。▼温暖化が進み、人類が生きていけない環境になったとしても、おそらく地球の寿命が尽きるわけでもないではないか。▼エゴをエコと言い換えてみても、そこからは何も生まれない。▼自然の恵みだけを享受し、調和と畏敬の念を忘れていることを、図らずも思い起こさせてくれた大雪ではなかったろうか。（あ）

和の知恵に学ぶ家

～"和"の美意識や知恵を住まいに～

w a : b i

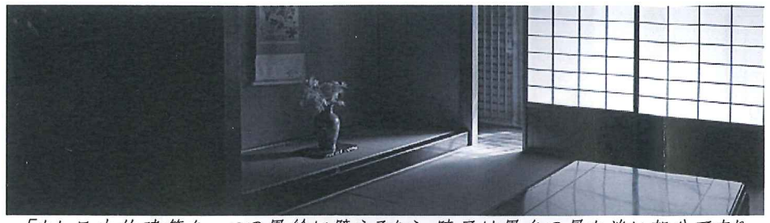
「侘び」「和の美しさ」「和を備える」・・・様々な字をあてるとそれぞれのイメージが涌くように、住む人に合った「和」の住まい方を楽しむ家のプラン「w a:b i（わび）」をご提案いたします。

和の光

日本ならではの 知恵と美意識

数寄屋造りの家、藁葺き屋根の民家や農家、細長い京の町家…、これら「ニッポンの家たち」は、美しい四季や、木を材料とした家づくり、履物を脱いで座って暮らすという生活スタイルなど、日本ならではの環境や文化の中で育まれ、独特な美意識や知恵を身につけてきました。

「w a:b i」はこうした美意識や知恵を現代の家づくりに取り入れた家。文化に育まれてきたものを受け継いだから、わたしたち日本人になじみやすい心地よさがあり、また、温故知新的な発見もある、ちょっとワクワクする家なのです。


「もし日本的建築を一つの墨絵に譬えるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。わたしは、数寄をこらした日本座敷の床の間を見るたびにいかに日本人が陰影の秘密を理解し、光と影の使い分けに巧妙であるかに感嘆する。」（谷崎潤一郎「陰翳礼賛」より）

「和」を楽しむ 5つのテーマ

「w a:b i」は、現代の家づくりに「日本の住宅・住まい方」の知恵や美意識を取り入れ、日本ならではの環境や文化の中で育まれてきた「和」を楽しむことを基本コンセプトとしています。温故知新の発見や、心地よさをもたらす「和」の空間を作り出すため、5つのテーマ提案します。

1・和の光

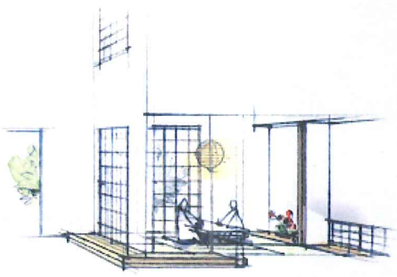
障子や格子を通した光と影が日本建築ならではの空間的な意匠美を作り出します。

2・和の視座

床に座っているときの目の高さ、つまり床座の目線が安心感、ゆったり感をもたらします。

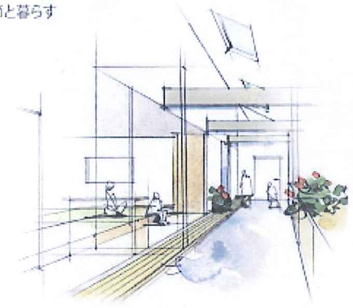
3・内と外の関係

坪庭、土間、通り庭、縁側など、建物の内と外のゆるやかなつながりが、癒しの空間を生み出します。



4・空間のつながり

自由で流動的な日本建築特有の「間」により、家族のコミュニケーションが自然に生まれます。


季節と暮らす

5・季節と暮らす

季節のうつろい、光や風を感じられる住空間を作り出す工夫が暮らしをさらに豊かにしてくれます。

空間のとらえ方や自然との関わり方、空間領域の曖昧さといった先人の知恵や文化が、日本人の記憶にある美意識を呼び起こし、「和」への憧れを刺激しているのではないでしょうか。

こだわりを実現して 暮らしを楽しむ

「w a:b i」は自由設計ですが、コンセプト別参考5プランを用意しています。

①「和の光をいっぱい感じられる家」
②「掘り座卓の茶の間があるだんらんの家」
③「外とゆるやかにつながっているコの字型の家」
④「自由に空間がつながった陽だまりのある家」
⑤「長い土間のある家」

構造は木造軸組工法なので自由度が高く、自分らしい「和」へのこだわりを実現できる住まいです。

※暮らしを楽しむ家「w a:b i」に興味がございましたら、丸永建設までお声をかけて下さいませ。新築、リフォームにかかわらず安心と責任の施工でお応えします。

丸永の現場見学会

建築中の現場で

強さと暖かさのヒ・ミ・ツ すべてお見せします!

とき◇２０１１年１月

２２日(土)・２３日(日)

（両日とも10:00～17:00）

会場◇米子市河崎2477

（2月には安来市内で開催予定です。）

詳細は丸永建設までお問い合わせください。

フリーダイヤル ０１２０－９７６－５１０

mail info@marunaga.jp

（現在 HP 工事中につきご迷惑をおかけします）

時代旅行

【墨の香り】

年賀状やら書き初めやら、筆を使用することが多い季節、墨汁なるモノの出現にて墨と硯の出番も少なくなったが、やはり水滴に水を入れて墨を作りたいものだ。手書きの書面を頂くと嬉しくなってしまうのはなぜだろうか。

写真は李朝（韓国…日本では江戸後期）時代の分院の水滴。

（生活骨董「昔話」店主）田淵　正彦

LOACH 1~2月のイベント他

【１月】
７(金)　営業開始
１８(火)　ﾅﾘｽ化粧品「エステフェア体感会」
２９(土)・３０(日)　イベント「天使の集まる庭園」

【２月】
４(金)　シャルレ「展示会」
１２(土)　フリーライブ
２０(日)　LIVE @ LOACH
２６(土)　イベント「天使の集まる庭園」

※予定が変更になる場合があります、
※詳細はお問い合せ下さい。

季節の風物詩

『新酒の搾り』

（出雲市・旭日酒造）

の巻

初搾り

冬は、気温が低く酵母の効果を引き出しやすいことから、酒造りの適期とされ、各酒蔵では春まで忙しい日々が続きます。

この時期は、十一月～十二月に仕込んだ新酒の初搾りが行われています。

タンクから送られた醪を袋詰め。

今回、新酒の搾りに参加させてもらったのは出雲市にある『旭日酒造』。搾るのは、酒好きな有志が米作りから関わって自分たちの酒造りに取り組んでいる、その名も『わーらちの酒』です。

下を向いての作業が続きます。

槽搾り（ふなしぼり）

久しぶりにお邪魔した蔵は、イイ感じに醪の香りが漂っています。太いホースを通って送られてきた醪を次々に袋に詰めながら上手に槽に敷き詰めていきます。以前は会のメンバーが桶を持って醪を運んでいましたが、去年からポンプで送るようになったそうです。

醪を入れた袋は上部を折り返しただけで口を縛ってはいません。しかし、ちゃんと布の目からだけお酒がしみ出ています。熟練の手さばきで槽はどんどん埋まっていきます。それにしても前のめりの作業はかなりキツそうです。

あらばしり

やがて芳醇な香りの液体が流れだしてきます。はじめは様々な雑味を含んだ酒ですが、徐々にまろやかな味に落ち着いてくるのがわかります。

その年その年の気候や米、麹の出来でも味が違うので、新酒を利く瞬間は緊張の一瞬でもあります。

たくさんの人々が思いを寄せ、心を込めて造るお酒は、今年も上出来だったようです。

さて、今年の新酒の出来やいかに。

投稿募集のお知らせ

『どじょうのささやき』では、皆様からの投稿を大募集しています。

- 私のこだわり
- オススメのお店
- 山陰の名所レポート
- 日常の風景
- お知恵拝借
- お薦めの本

など、

どんな内容でも結構です。なお、掲載させていただく際に若干の加筆・修正等をさせていただく場合がございますのでご了承下さいませ。

送り先　丸永建設株式会社（担当:安達）

ハガキ　〒692-0023 安来市黒井田町1895-3
ＦＡＸ　（０８５４）２３－２３４８
e-mail　dojyou@marunaga.jp

○編集後記○

明けましておめでとうございます。・・・本当ならお正月に間に合うようにこの「どじょうのささやき」を皆様にお届けしたいと頑張っていたのですが、年を越してしまいました。その代わりと言っては何ですが、年越しの豪雪についてもふれることが出来ました。皆様、新年早々雪かき等お疲れ様でした。各地で多くの被害が報告されていますが、皆様のところは大丈夫だったでしょうか。これからますます寒さの厳しい季節となります。健康一番です。風邪などお召しになりませんよう、ご自愛くださいませ。

（の）